

## 第2回総合教育会議

日時 平成31年1月31日（木）午前10時～

場所 松戸市役所 教育委員会5階会議室

○胡内総合政策部審議監 皆さん、おはようございます。本日は、御多忙の中、平成30年度第2回松戸市総合教育会議に御参集いただきまして、まことにありがとうございます。私は、進行を務めさせていただきます総合政策部の胡内です。よろしくお願いいたします。

なお、本日、市場委員におかれましては、所用のため欠席となっております。

それでは、開会前に、まずお手元の資料を確認させていただきたいと存じます。

ホチキスどめで皆さんのお手元に配付させていただいておりますが、表紙が次第になっております。めくっていただきまして、本体資料として「松戸市教育大綱に基づく教育委員会での施策の展開について」という題名で、資料1ページから4枚目までが本体資料になりまして、それ以降は「松戸市教育大綱」を参考資料として添付させていただいております。不足等ございませんでしょうか。

では、進めていきます。

なお、会議の進行に当たりましては、議事録作成の関係から、まずお名前をおっしゃっていただき、その後、御発言いただければと思いますので、御協力のほどよろしくお願いいたします。

それでは、これより本会議の議長であります本郷谷健次市長に議事の進行をお願いいたします。

○本郷谷市長 まず、傍聴人につきまして御報告いたします。

本日の会議に4人の方から傍聴したい旨の申し出があります。松戸市総合教育会議傍聴要領に基づき、これをお認めいたします。また、会議開会以降、傍聴希望者があれば、随時入室を許可いたします。

では、傍聴人を入場させてください。

[傍聴人入場]

○本郷谷市長 それでは、これより平成30年度第2回松戸市総合教育会議を開会いたします。

今回の会議の議事録署名人につきましては、伊藤教育長、山形委員の2名をお願いいたします。

それでは、お手元にお配りいたしております次第に従って議事を進めたいと思います。

松戸市教育大綱の策定以降、この総合教育会議では、その理念の実現に向けて、主に重点的に取り組むべき施策につきまして個別に議論してまいりました。平成28年1月にこの教育大綱を策定してから3年が経過いたします。そこで、今回は、個別の施策についてではなくて、教育委員会において展開されている各施策につきまして、一度、教育大綱の柱に沿って整理し、俯瞰的に見た上で、広く議論をしていきたいと考えております。

それでは、議論に入る前に事務局より説明をお願いいたします。

○胡内総合政策部審議監 それでは、資料について御説明させていただきます。説明につきましては、教育企画課長、よろしくお願いいたします。

○菊地教育企画課長 それでは、御説明の前に資料について申し上げます。

資料1ページをご覧ください。各事業が表記されている右上に米印書きで「★は、新規事業を表わします。」とありますが、その下にある各事業の中の新規事業には、見やすいように赤い星印の表記になっております。また、2ページ、3ページに新規事業はございません。御承知おきいただきたいと存じます。

それでは、松戸市教育大綱に基づき、平成30年度に松戸市教育委員会が行ってきた施策を資料をもとに御説明いたします。時間の関係もございますので、抜粋しての御説明とさせていただきます。

それでは、まず、柱No.1、松戸に育つ子どもたちが、それぞれの能力や個性を伸ばせるような教育環境をつくりますー可能性にチャレンジする力を育みますーに係る施策についてです。

施策の一番上、指導課の言語活用科の推進の中の①中学生が新たな英語教授法であるTESOLで英語を学ぶために、教員海外研修を実施についてです。昨年の夏休み期間の1カ月を利用いたしまして、教員がオーストラリアに赴き、TESOLという英語を母国語としない人たちにわかりやすく英語を教える指導方法について、研修を受けてまいりました。この研修をもとに、学んだ指導方法を2学期以降の英語の授業に生かすとともに、知見を市内に広めていけるよう、松戸版のTESOLプログラムの開発に努めているところでございます。

施策の3つ目、公立夜間中学校の開設準備についてです。松戸市での学びのセーフティネットの充実を図ることを目的に、教育の機会確保法施行後、全国で初となる夜間中学校の開設を目指して、他自治体への視察、条例等の改正、地域住民への周知、広報、施設の改修、備品等の整備などの準備をしてまいりました。本年4月に、松戸市立第一中学校みらい分校として、旧古ヶ崎南小学校を使用して開校する予定となっております。

その下、就学援助制度の充実についてです。子どもの貧困が問題視され、新入学用品の前倒し支給等の対応が求められておりました。松戸市では、新入学生の学用品費について、中学校では平成30年度入学者から入学前支給を実施し、小学校については平成31年度入学者から実施いたしますことから、現在、支給に向けての準備を進めております。

市立松戸高等学校の施策といたしましては、予備校と連携して大学受験に対応した講座や英語の補習を実施しております。

また、小中高大連携・キャリア教育としましては、千葉大学等と連携し、教授や学生、留学生を招いて、市松生とのディスカッションを行ったり、近隣の小中学生に海外研修の経験について報告会を行ったりしております。

続いて、施策の下から5番目、言語活用科を基盤とした小中一貫教育の推進についてです。本市では、変化の激しい社会に対応していくために必要な論理的、批判的思考力やコミュニケーション能力を身につけるため、言語活用科を平成25年度から市立小中学校全校で実施しております。子どもたちが使うワークブックや教師用の手引き書を作成するなど、小中で一貫した教育方針で授業が行えるような取り組みを行っております。さらに、

昨年度から、第五中学校、東部小学校、梨香台小学校の3校を小中一貫モデル校として研究指定をし、小中学校を兼務する教員を試行的に配置し、その成果を検証する研究を進めているところです。

その他、記載の施策を中心にさまざまな事業を行っております。

次に、柱No. 2、子どもたちが地域社会の中で育つように、市民みんなで子どもの成長を支える環境をつくります―松戸で子どもを教育したいと選ばれるようにします―に係る施策についてです。

施策の2番目、幼児家庭教育の啓発のうち、①パンフレットの継続配布については、幼児期における家庭での教育は非常に重要だと認識されてはおりますが、家庭教育力が低下しているとも言われております。本市では、保護者の方に子育てに関する情報や学習機会を提供するため、脳トレで功的な東北大学の川島隆太教授に監修していただいて作成した「幼児家庭教育啓発用パンフレット」を本市に転入してきた方々や母子手帳の交付を受けた方について配布を行っております。

施策の1つ下、スクールソーシャルワーカーの学校固定配置による「チーム学校」体制の確立です。複雑化、多様化した課題を抱える児童生徒、家庭が置かれた環境を改善するために、教育的アプローチだけではなく、社会福祉的な側面からのアプローチも行っていくよう、六実中学校など3中学校にスクールソーシャルワーカーを固定配置し、教員だけではなく、いろいろな方々に教育にかかわる「チーム学校」の取り組みを行っているところです。

その他、記載の施策を中心に事業を行っております。

次に、柱No. 3、市民みんなが、いつまでも元気で学び続けられるように、学習活動や運動ができる環境をつくります―高齢者も障害のある人も生きがいを持ち続けられるようにします―に係る施策についてです。

施策の一番上、市民の多様な学習機会の提供についてです。市内在住・在勤・在学の方を対象とした成人講座や、60歳以上の方を対象とした松戸生涯学習大学を開催しております。この生涯学習大学受講者の中から、次年度への自主企画の提案もしていただいております。また、子育て世代の学習機会の拡充として、保育付講座を増やしたり、親子参加型の無料講演会等を開催してございます。

続いて、施策の2番目、青少年に向けた学習機会の提供の②青少年活動を支援する指導者養成に向けた講座の開催についてです。青少年教育にかかわる指導者の養成と交流を図るために、子どもとかかわる際のコミュニケーションやリーダーシップのとり方について学ぶ講座を主に高校生から大学生を対象に開催しております。受講者の中からボランティア等の活動につなげた方もいらっしゃるようございます。

また、③青少年会館居場所事業の実施では、子ども同士の学年を超えた交流や仲間づくりなど、青少年会館を拠点とする世代間交流を目的とした事業を展開しております。

次に、施策の3番目、宇宙や科学の楽しさを知る学習機会の提供については、本年8月

28日に、松戸市天空スーパーアドバイザー兼市民会館名誉館長でもある山崎直子宇宙飛行士の講演会を開催しております。

その他、記載の施策を中心に事業を行っております。

次に、柱No. 4、松戸で文化やスポーツの活動をする人たちが活躍できるように、多様性が尊重され可能性を発揮できる環境を整えます—文化とスポーツで松戸の魅力を高めます—に係る施策についてです。

施策の2番目、歴史的文化遺産の環境整備については、戸定歴史館において、国の名勝に指定された戸定邸庭園の復元工事が終了し、東屋も復元されました。隣接する千葉大学園芸学部の近代庭園群も含め、文化拠点としての価値が高まったと考えております。

また、スポーツ環境の整備では、陸上競技場の3種公認の継続の準備を進めているとともに、野球場の人工芝化や電光掲示板等の設置などを行い、利便性を高めているところでございます。

歴史や文化に触れる機会の提供としまして、博物館の特別展「ガンダーラ」や企画展「日本の太鼓・世界の太鼓」などを行いました。

美術に触れる機会の提供としまして、森のホール21エントランスホールに設置したアートスペースにおいて、松戸の作家の個展として作品を展示しております。

その他、記載の施策を中心にさまざまな事業を行っているところでございます。

以上、雑駁ではございますが、施策の説明とさせていただきます。

以上でございます。

○本郷谷市長 本日の議事にかかわります説明は、以上のとおりでございます。

まずは、意見交換の前に、ここまでの説明につきまして、担当への質問があればお願いいたします。何かありますか。議論しながら、そこでまたあればということでもよろしいですか。

それでは、以降の進め方といたしましては、松戸市教育大綱全体に関して広く議論できればと考えておりますが、今日は個々の具体的な話というよりは、全体の施策の方向とかということで議論していただければと思います。

今、4つの項目が出ましたので、それぞれの項目ごとに意見を聞きながら、あればそこで議論をし、最後に、その他ということで、それも含めて結構ですけれども、意見があれば、順番に進めたいと思いますが、よろしいですか。視点がみんな違うので、ばらばらになって、議論が入ってしまうとわかりにくいと思うので。

では、まず、柱No. 1のほうから順番に、武田委員のほうからいいですか。意見とか何かあれば。柱No. 1の教育関係についてです。

○武田委員 やはり、教育大綱を作った頃は、変化がこれから見込まれる時期だったし、文科省からもいろいろなことが変わってくるということが想定されていた時期に、この大綱をつくるという時期が重なっていたと思います。また、学校の中でやらなければいけないこともさらに増えてきている中で、一生懸命いろいろな施策を続けていくということでは

連動させているなという、非常に努力されていると感じています。4個のうちの1という  
と、学校の教育のことをここでは扱っているんですけども、その中でも、やはり一番近  
頃言われることで目立つのが、地域連携とか、学校は学校、外は外ということではなくて、  
例えば部活であっても学校の教育と分割されていくような方向性があったりとか、学校の  
先生の仕事の範囲も、今までとは少し考え方を変えていこうというようなところが見えて  
きているので、そのあたりがここに反映されてくると、また少し捉え方が変わってきて、  
ほかの柱とも連動していかなければいけなくなっていくのかなというふうには想像してい  
ます。

○山形委員 私は、前回の大綱づくりの会議には参加させていただいていなかったので、  
当事者として、保護者としての視点からこの大綱を議論するという形で、意見を述べさせ  
ていただきます。

1と2の柱は子どもに関してで、1に関しては学校教育というところで、大綱に合わせて  
充実した内容になっていますし、他市では行われていない魅力的なことや夜間中学の開  
設など、先進的な動きはある一方、これを行っている、その軸になっている大綱自身を保  
護者として何も知らないというか、情報として、こういうことが理念としてあってこれが  
起きているというのが、現場レベルでは全然届いていないです。保護者の中では、そうい  
うことが弱いと思います。

例えば、下のほうの新規事業の言語活用科を基盤とした小中一貫教育推進校で、私はこ  
この適用ではないのでわかりませんが、ここに通っているお子さんたちの保護者の方が、  
それは連携校ですということの主體的に知っているのか。これは細かいことにはなるん  
ですけども、子どもを学校に通わせている親として、また、子ども自身も、そういうよ  
うな理念のもとに動いているというような、その軸というような部分での大綱のあり方とい  
うのを何か考えていくのもありかと思いました。

○伊藤委員 この柱No. 1については、そこで述べられているように、今後ますますグロー  
バル化する社会の中で活躍する人材を育成するという点が、私自身としては非常に大事か  
なというふうに思っております。そういう観点から見ると、今回、柱No. 1の中に新規事業  
がいろいろ盛り込まれ、先ほど説明されたような教員の海外研修とかいろいろなことをや  
っておられて、非常にいい取り組みを行っているし、他の自治体と比べても、そういう英  
語教育に対する取り組みというのは非常に進んでいるし、成果も上げているのではない  
かというふうに思っております。

ただ、全体的に見ると、施策全般が、子どもたちの英語教育の、いわゆる底上げを図る  
というか、全体のレベルを上げるところに非常に注力をされているし、もちろんそ  
れは一面で大事なんですけども、他方において、柱の中にあるように、個性を伸ばして、  
特に可能性にチャレンジするそういう取り組みをする子どもたちが出てくるような、そう  
いうものを後押しするというか、何かそういった施策があってもいいのかなと。そういう  
意味で、例えば、試験を含めていろいろな選抜をして、優秀な生徒には、中学生の段階か

ら短期研修として海外へ行かせることもいいと思います。とにかく子ども時代に受けた刺激というものは、非常に大きな、将来にとって大事なもののなので、そういったものを何か、松戸市ではこんなこともやっているんだというようなものが、何かこの中で見られるといいなというふうになんかちょっと思っております。

以上です。

○山田委員 今回の会議に当たって、前回これを決めるまでの議事録を読み返してみました。いろいろな視点が交錯しながらここにたどり着き、我々が当初もろ手を挙げてこの文章でいいじゃないかと言ったわけではない文章をもとに、またこういう施策を評価するという機会を与えていただいて、逆にこれは新たな視点でいろいろ発見ができるなど、今思っているところであります。

この今ある大綱に基づいてということで、まず、この柱 No. 1 ということで、とりわけて発言をさせていただきます。ここは学校教育が主な分野であります。これの区分けがちょっとどうなのかなと思うところが若干ありまして、後に参考資料でついていますけれども、「子どもたちが安全に安心して学べるようにできるようにします」と、柱 No. 1 の説明に入っているんです。安全・安心のことについてここに入れるのかどうかというのは、みんなまたがってきているので、柱 No. 2 のところでも、これはボランティアというくくりで今度は柱 No. 2 に入っている安全の話もあるし、それから、日本語を母語としない児童生徒の日本語指導の充実というの、実は柱 No. 1 の重要な部分であるんだけど、柱 No. 2 に区分けしているというのもあります。ここら辺については、だから問題というわけではないんですけど、オーバーラップしているという認識でいろいろ評価しなくてはならないのではないかというふうに思っています。

そんな中で、このオーバーラップしているというところで、後で出てくるんですけど、スクールソーシャルワーカーの配置について、前の議事録を見ると、市長が当初から、学力の向上をというのは市長にではなく当時の部長からも御発言があった中で、どうやって松戸の教育が学力の向上に向かっているのかという点で、スクールソーシャルワーカーの配置というのは、非常に柱 No. 1 の中で重要な部分だろうと私は思っています。つまり、教員が教育の本来的な内容について、どれだけプロフェッショナルに児童生徒と対することができるか。そのレベルを上げていくということが、非常に遠回りであるようであるが学力向上には重要だろうというふうに思っています。これは、どのような事業が実現できるかという中において、それ以外のこと、事務的な負担もあると思うんですけど、福祉に関するようなことについて教員が担っているものをどう切り分けていくかというときに、人材がなかなか足りないこともあり、難しいですけど、スクールソーシャルワーカーが柱 No. 1 の重要な下支えをするのではないかと、それが松戸の特色になり得るのではないかと改めて感じています。

もう1点だけ。今度は、柱 No. 1 に純粋な部分ですけど、言語活用科なんですけど、英語についてかなり実績が上がってきているという評価は、私もいろいろな議論を通じて理

解をしているつもりであります。もう一つは、日本語分野です。日本語分野の言語活用科の推進をどうするかということと相まって、松戸の教育の特色が出るのではないかという部分についての取り組みをもう少し目に見えて整理していただく。あるいは、取り組みが足りないとすれば、クローズアップしていただくということが重要なのではないかと思います。

そこで、先ほど伊藤委員もおっしゃったような、何か粛々とやっていくべきことのほかに、日本語あるいは英語について、お金をかけなくてもできる市としてのイベントとか何か松戸市の姿勢を打ち出せるようなことがあるのではないかということ、これを柱として言語活用科に取り組んでおりますので、ぜひここら辺はこうやって整理したときにもっと出てくればいいのではないのかというふうに思っております。

それと、もう1点。これは、当時の議事録をもう1回読み返してみますと、広く、枠にはまらない議論をしてほしいんだということを市長が繰り返しおっしゃっていただく中で、私立学校、県立高校も含めた広い分野に対して議論をしてほしいということを繰り返しおっしゃっています。このカテゴリーに入るかどうかはわからないんですが、いや、それは権限もなければ、ルートもないんだから違うよと、私はそのとき思いました。ただ、今になって読み返してみると、そういう視点で、我々が教育という分野で、あるいは学校教育という分野で発信をしていいのではないかということをして市長が言っているのだとすれば、恐らくそれについては取り組んでいないのではないかと思います。いるとすれば、それについて御説明をぜひいただきたいと思っています。

感じる場所は、以上です。

○伊藤教育長 施策を進めている側なので、意見といたしますか、申しにくい部分もあるのですが、あえて、いろいろ皆さんから出た意見を入れながらお話をさせていただきたいと思っております。

今日の機会は、私はすごく重要な大綱について考える機会というふうに思っているんですが、今の話の流れから、まずは今出た柱 No. 1 に限って申しますと、松戸市にいるとなかなか見えにくい部分があります。公立学校の教育というのはどうしても、先ほど伊藤委員から出てきたベースアップの部分はどうするか、あるいは、スクールソーシャルワーカーの存在がすごく大きい、そういう下支えをどうするかということが基本となります。先生方の学校の授業も、わからない子をどうするかということがまず中心になっていて、全国の学校でいうと、ほとんどがそこにしか注力していないと言っても言い過ぎではないと私は思います。そういう中で、松戸市が取り組んでいる言語活用科は、いや、そこだけではなくて、やっぱり英語とか日本語で頑張ろうとする子にも力をちゃんと注ぎたいんだという、学力でいうと上のほうの子どもたちもどうやって伸ばしたらいいかという、その2つの方向性を追いかけているんだということを、まずは理解してもらいたいというふうに思っています。そういう意味では、私は全国の中では珍しい市の取り組みに十分なり得ます。ですから、スタート当時は、いろいろなところから呼ばれて、前の教育長を中心にいろいろ



な発信をされていました。

TESOLにしても、IBAの実施にしても、フォニックスにしても、そんなにあちこちでやっていることではなくて、そういう部分に得意になれる能力を持った子たちをどうやって育てたいかという、そういうことのあらわれだというふうに受けとめていただければと思います。

そういった意味では、伊藤委員からあった中学生でも海外へというのは、今、経済振興部のほうともリンクして、それは国際交流協会にもお力添えをいただいて、スピーチコンテストの関連で行ったりしてもらっていますけれども、それをさらに広げるとなると、また違う難しさも出てきますが十分検討には値するのかなというふうに思います。

いろいろな御意見をいただいたので、また参考にしながら、引き続き考えていきたいと思えます。

○本郷谷市長 私の感じでいくと、この教育大綱の柱No. 1については非常によくやっていただいているなという感じがいたします。ここに書いてあるようなことどれも本当によく進んでいるかと思えます。

この中でちょっと抜けているなど、大事だなと思うのは、IT関係が言葉としてもちょっと抜けているなど。やっぱり手段として、ITに小さいうちからもっと親しんでいただかないと、今、社会はほとんどそういう世界ですから、言葉として、分野としてちょっと抜けているなという気がします。

それから、前にお話ししたように、教育委員会というは公立の小中学校だけではなくて、松戸の子どもたちをどうやって教育するのかというのがテーマと考えれば、先ほどあった県立高校だとか、あるいは私立の中学、高校のあり方というのは、彼らは自分たちで一つの施策を持ってやっているけれども、市として見たときにそれぞれの配分だとか、もっと力を入れてほしいところ、あるいは、我々が支援してもいいところがあるのではないかなと。各学校で頑張っているだけではなくて、我々も、県立の高校とか、あるいは私立でも、バックアップしたほうがいい面もあるのではないかという気もするし、また、そこでの意見交換というのも含めて、そこもちょっと抜けているなという気がします。

今、松戸市は、外国の人がだんだん増えてきていて1万七、八千で、これは、これからの交流を考えればもっともっと増えていくでしょう。あるいは、オリンピック等を考えれば、もっともっと人の交流が出てくることを考えれば、学校教育等においても、松戸市内に2万人近い方が、100カ国ぐらいの人がいるので、いろいろな意味でもっと、ただ単に勉強だけというのではなくて、もうちょっとそういう人たちとの接触、市内でも国際的な文化に接する機会があるのではないかという気もするし、そういう分野ももう少し考えてもらいたいのかなという気がします。

とりあえず、この中でちょっと見ていて、もうちょっとやってほしいなど、やってくれるといいなというのはそんなことかなと。せつかく、今、1万七、八千と、100カ国ぐらいの方が見えていて、いろいろな文化の人が近くにいる、それも一つの大きな財産だと

思うので、そこから得る国際的ないろいろな勉強も、外に行かなくても、中でもあるのかなと。

それから、先ほど言った思い切った意外性のある施策というのもこれからは織り込んでいってほしいなと思います。今までは、どちらかといったら、まず全体のレベルを上げるということに力を入れてきたわけですけども、それぞれ非常に能力のある人がいれば、そういう分野を伸ばしていくこともまた必要でしょうし、あるいは、そういうところについていけない子がおれば、それをどうやって上げるかという個々のもうちょっときめ細かい施策、両方の施策が必要かなというふうに思います。

とりあえず、次へ行って、後で議論しましょうか。

2番目をまた順番で、いいですか。

○武田委員 先ほども少し出てきていたんですけども、この中で一番気になっているところはスクールソーシャルワーカーについてなんです。ほかにも家庭教育とかいろいろあるんですけども、かなりいろいろな自治体でこの人材に対しては苦慮している。また、充実できているところというのは、あるところもあります、なかなか維持するのが難しいのが現状で、予算的なものもある中で大変だと思います。ほかの自治体の例で聞いた話なんです、安定しないで困る、なかなか長く継続してくださらないというスクールソーシャルワーカーの人も出てきているということで、これから松戸市が人材を増やすに当たって、いかに長く安定して継続していただいて、いかにその地域のことをわかっていただくかという観点で、人数だけではない配置というのを考えていかないといけないと思います。すごく流動性があるということを知っていて驚いています。

それと、やはり免許取りたてという方が人数としてはものすごく多くなってしまいますので、その辺の能力バランスとか、あるいは、人材を育てる環境みたいなものも含めてこれを押し進めていかないと、数だけそろいました、全校配置しましたでは、恐らくあまり有用的ではないのかもしれないという懸念が見えてきています。それがこの中では一番気になっていることです。

あとは、地域の中でということで、こういう施策の中でやることではないんだと思うんですけども、いかに地域ボランティアというか、市民講座の中からもそういう方というのは出てくるかとは思いますが、そういった方がどういう形で連携できるのかというものを、もしかしたら少しずつ施策として取り入れていただいているのかもしれないんですけども、見える形で出てくると良いと思います。市民の方がより入りやすい環境というのはどういうふうにしたらできるのかなというところを考えています。市民講座だけとか、学校だけとかではなくて、その交流点はPTAとかになるのか、ちょっと具体的にどこがはっきりは想像できないんですが、青少年会館とかいろいろなところで、その交流点を見出して参加していただける形というのをもう少し模索できたらなと思います。

以上です。

○山形委員 地域のところで、幼児教育に関しては、松戸市は本当に素晴らしい活動をさ

れていると思いますし、他市に比べて子育てを応援するような講演会、勉強会もたくさんあること、医療ケアに関しても、ほかの市に比べると助かっているという保護者の声なども聞かせていただいている、とてもよいところはあるんですが、子育て支援の現場の人間と、お母さんたちをこの10年見てきまして、本当に子ども自身が変わってきている現状を、家庭教育では足りないところをサポートする、プラスアルファ、子育てと教育がすごくつながっていないというのを、教育委員会にいさせていただいて、この2年すごく痛感しました。そのパイプがないというか、生涯学習と教育は部で分かれていますし、子育て支援も部で分かれていますので、そこを何かつなぐようなものが、一つ課があるといいのではないかという考えをもちました。やはり何か子育てに問題があるということは、学習するのも困難を抱えていく。それを保護者になったときに、子育て支援は充実して、ここに相談するけれども、では、次といったときに、かなり迷子になってしまったりとか、一貫性がなく、同じ話をまたここでしなくてはいけないのかというところで、現場では、親たちは混乱している部分がありますので、その部分のパイプを強めるような形と、それをみんなでやっていくというような形が強まっていくといいなと日々思っています。

とてもいいイベントがたくさんありますし、子どもたちが集まって、家族で集まるようなイベントも、ほかの市に比べると断然多いと思うのですが、そこに足を運べない人もいますし、運べなくてもその部分は、子育て支援はLINE@が始まったりとかあるんですが、教育になると途端に学校の先生にお願いという形になっていきます。学校の先生にお願いできるような保護者だったらいいんですが、それができない保護者もいますし、平日フルタイムで働き、共働きの親子が来ているので、やはり土日に機能していないこととかも大きな壁になると思います。まずどこに相談していいか迷子になっているというのが、現場レベルとしては感じるところで、もっと子育て支援課と教育委員会の連携が密になることで、一人一人を大切にすることが実現可能になるのではないかと日々感じています。

以上です。

○伊藤委員 この柱No. 2については、一つも新規事業としてマークされているものがないということは、もう既に取り組みが始まって何年か経っているということだろうと思うんですけれども、基本的には、学校教育以外の面で子どもたちをどのようにサポートしていかなければいけないかというところで、いろいろな方法があって、細かい、いろいろな手厚い試みが、施策としてとられているということで、私はこのこと自身は非常にいいのではないかというふうに思っております。

1点だけ注目しているのは、先ほど市長からもお話があったような、日本語を母語としない児童生徒への日本語指導をさらに充実させていくんだという方向性が示されているわけですが、テレビで少し前に見たんですが、外国籍の子どもで、日本語ができないからということで小学校に入るのを拒否する自治体があるんです。それは本当におかしな話で、そういうことはもちろん松戸では行われていないし、そういった子どもたちに対する、特に日本語支援のサポートは、非常に手厚く行われているということなので、継続的

にそれをぜひ進めていていただきたいと思います。先ほど市長がおっしゃったように、恐らくこういった子どもたちは今後ますますふえていくと思いますし、かつ、私も学校を訪問させていただいて聞くんですけども、こういった子どもたちにはかなり地域的に差がある。日本語の指導を受けるような子どもがいないような学校もあれば、もう何十人というような学校もあり、かなり地域的に格差があるので、その辺の実情をよく踏まえた上で、きめ細かいサポートというかそういったことを、特に日本語の指導員がこれからも不足していくと思いますので、そうした人たちへの何かサポートというかそういったものを進めて、全般的にこれがうまく回るようにしていく、そういう努力を今後もしていただきたいというふうに思っております。

以上です。

○山田委員 先ほど申しあげましたスクールソーシャルワーカーのことについては、そのとおりでありますが、補足的にもう少し言い添えると、この間、子どもの未来応援会議という会議体があって、いわゆる貧困問題についての対応を全庁横断的な組織で検討したというところに委員として伺ったときに、医師会の先生が、ドクターにもぜひつないでくれとおっしゃっておられました。いろいろな意味でそういうのがある。私、やっぱりその情報のハブになるのは学校だと思うんです。野田での悲しい事件が今報道されておりますけれども、あれもやっぱり児童だと思います。どこの責任とかという問題ではなくて、そういうときにどう適切な場所につなげるかといったことを教員がやりましょうでは、これは絶対に回らない。そこで、そういう情報を地域あるいは行政、民生委員や児童委員とかも含めて、そういうところとどう連絡を密にとれるかという存在は、これは、先ほどは学力にと言いましたけれども、学力だけではなくて、当然こういう子どもの福祉の問題にも通じるし、今、六実から3校ですか、スクールソーシャルワーカー配置が、中学校区で3校区だと思いますが、これをどう充実させるか。難しい問題もあるという御指摘も今もありましたけれども、これを人材育成から含めて、あるいは、その研修から含めて、松戸がどう力を入れるかというのは、いろいろなところに波及する。一点突破で、全面展開の施策だと私は思います。ですので、このスクールソーシャルワーカーは何としてもやるべきだろうと。その言い方とか、肩書とかがどうかという問題ではなくて、そういう存在をどうするかということについて、スクールカウンセラーというのもその下の欄にありますけれども、そういったことを含めて、ぜひこれはお願いしたいと思っています。

それから、もう1点だけ。学校支援人材というのが下のほうにあります。これは、2年前の議事録を読むと、市長も、市民が生涯活躍できるという中にボランティアを前提とした言及を何回もされているように思います。それとこれとがここで重なるかどうかということはありませんけれども、学校もボランティアを受け入れるのには、手間もかかるし、大変だと思います。しかし、それをどう結びつけていくかという観点は、もっと持てるのかなというふうに思います。この教育大綱の柱 No. 2 と No. 3 にかかわる話ですけども、退職されて市内におられる方の力をどう引き出すか。社会で活躍されて、退職後穏やかな毎

日を過ごされて、それが目標とおっしゃる方もいるかもしれないけれども、やはり、どうやりがい、生きがいとかといったことと、生涯学習という意味では、大人を見ればそうだし、この児童をどう守っていくか、育てていくかということに参加する、その参加型が、選ばれる松戸になるということ、教育大綱はそういう書き方をしていますから、参加型で、みんなが参加することでそういう町にするんだというのが、この柱 No. 2 です。ですから、ここのボランティアのところは、なかなか難しいのはわかりますけれども、学校をはじめ、そのほか、子供会とかいろいろなところで、もっともっと努力して結びつけるべきことなんでしょうと思います。私たち教育委員会だけでなく、市長部局の中でもなされるべきことなんでしょうと思います。ちょっとそこら辺を気がつきましたので、発言しました。

以上です。

○伊藤教育長 まず、柱 No. 2 で、新規のものが何もないといいますのは、私は別にマイナスのイメージで全然捉えていません。幼児教育に関しても、本来は市教委のルーチンではないものにも3年前から頭を突っ込んで、やらざるを得ないというふうに覚悟して、これはやっているわけです。先ほど子ども部との連携の話もありましたけれども、子ども部も強く連携をしていただいているおかげで進んでいるこの施策も、全国的にとっても珍しい事業だというふうに私は認識していますので、それぞれの担当課がすごくよく頑張ってくれているなというふうに思います。

今いろいろな御意見をいただいたんですが、例えばスクールソーシャルワーカーにしても、すごく難しい仕事です。これはかなりいろいろな能力を持ちながら、なおかつ経験もある程度踏まえないと、学校でスクールソーシャルワーカーの仕事をこなすというのは、そんなに簡単なことではありません。ですから、例えばこれを全校配置するなんていうことは、私は全然考えていません。市の45校、それから20校、それぞれの中で本当に必要なところに置いて、頑張ってもらおう。そういうふうにある程度絞った人材を絞った地域に置かないと、下手するとパンクしてしまうという、そのぐらいの危険性を持っている事業なので、これは慎重に進めていきたい。ただ、置けば、本当に効果はすごくあるので、その辺のメリット、デメリットを十分考えながら進めていきたいなと思っています。

そうやっていろいろ考えていくときに、松戸市は49万人を超えて、特に教育、子育てに関しては、1個の施策を全部にとというのは絶対に無理な規模になっています。その辺で、例えば3つ、4つに分けて進めるとか、あるいは、先ほどから出ているようにそれぞれの地域のいろいろな特性を踏まえながら、地域ごとに施策を考えていくとか、そういった工夫がどうしても必要になっている、今の自治体の規模だと思うので、その辺は御承知おきいただければなというふうに思います。

やっぱり、子育てがどんどん難しくなる中で、みんなでやっていかないと、いろいろな人たちの力を借りてやっていかないと、どうしても大変なところがあるなと。そういう時代を迎えたのでというふうな気持ちもあります。後ろに各部長がいらっしゃいますけれども、そこに子ども部長もいらっしゃって4人で、できればいろいろな知恵を出し合ってや

るような体制もこれからは必要なのかなというふうに思います。

○本郷谷市長 私のほうは、まず、幼児家庭教育の啓発ということでやっていただいていると思っていますけれども、幼児の家庭だけではなくて、要するに、昔、幼稚園は教育委員会にあって、保育園は市長部局と、今でいえば子ども部において、ばらばらにそれぞれでやっているから、今の社会で、子どもと考えたら同じというか、子どもという視点で考えたら、ばらばらにやられたら、特に学校へ行く前は教育も必要だし、保育も必要だしということで、どっちに一本化という話で、とりあえず、今は、保育体制の整備が喫緊の課題だということで、今は子ども部に一元化しているけれども。とはいいいながら、子どもたちの教育というのは大変重要なので、学校へ行く前の子どもたちも、保育と教育をしっかりとさせなければいけないわけですが、特に保育園、幼稚園いずれの先生方も含めた家庭ではなくて、家庭も必要だし、幼稚園、保育園での教育のあり方も、幼稚園の先生とかをどう指導していくかということも、ぜひ教育委員会のほうでしっかりとやってほしいなと。これを子ども部のほうでやれというと、別々になってしまうから、教育という視点からいけば、やっぱり教育委員会ですっきりやって、持っていただきたい。だから、幼稚園の先生方とか、保育園の先生方の指導ということは、今まで3歳、5歳の幼稚園が非常に比率が高くて、6割か7割ぐらいが幼稚園になると、保育が若干という感じだったのが、今はもう保育が多いわけで、幼稚園より保育へ行っている子のほうが、もう間もなく、全国的にいったらもう逆転しているけれども、松戸の場合は、幼稚園をいかに活用するかという施策をとっているのでも、まだ逆転はしていないけれども、方向しては。それから、特に1歳、2歳の子どもたちは、どちらかといったら、もう完全に保育で、昔だったらほとんど専業主婦が家庭でしていたわけですが、今は1歳、2歳の4割ぐらいはもう保育園に預けていて、これはこれでとまらないから、5割とかもっといくでしょう、3歳からはもうほとんど100%近いから。そういうことを考えると、家庭での今までの教育が社会で教育、だから、保育園とか幼稚園での教育が今まで以上に重要になるという視点から見ると、この幼児家庭教育だけではなくて、保育園、幼稚園の教育も含めて、しっかりとやってほしいなというのが一つです。

それから、2つ目は、ちょっと細かいけれども、先ほどあった外国人の子どもたちの問題を含めて、子どもたちはどちらかというといくと早くなじんでくるんだけれども、お父さんは仕事したりして、結構日本語をしゃべる人もふえるんだけれども、お母さんが社会との連携がないので、はざまになってしまっているんです。お母さんたちが日本語を勉強する機会もレベルも保護者に対する日本語の教育もちょっと視野に入れとかないと、本当にはざまになってしまふ。やっぱりお母さんたちがちゃんと安心して、安定した気持ちで生活を送ってくれないと、子どもたちに悪い影響を与えるので、そこをしっかりとやってほしいなと思います。

それから、学校安全ボランティアがあるけれども、もう去年ですか、悲惨な事件が起きたわけだけれども、六実のほうで、子どもの見守り隊をつくっていただいて、もう千人を

超える人たちが、一生懸命表示カードをつけて活動していただいているけれども、こういったものは、ぜひ交通安全のほうと一緒にあって、地域の見守り隊を、ただ単に安全ボランティアの学校の通学だけではなくて、見守り隊をもうちょっと一緒にあって、地域によって強いところと弱いところとあるのではないかと思う。

それからもう一つは、先ほどあった地域との連携なんですけれども、60歳以上の人たちをどうやってもっと巻き込んでいくのかと。長い課題でありながら、なかなか市民の気持ちとこういう教育の場での活躍の場とがうまく結びつかなくて、うまくいっていないんだけど、市民部でやっているのは、ボランティアしたいと思っていても実際にやろうとするとギャップがあるんです。会社へ行っていた人がほとんどだから、そうすると、会社の中の理屈とか、日本全体の話や東京の話は知っているけれども、松戸の話は知らないとかということで、1年間のボランティアの育成のコースを1個つくったんです。今年でもう2年目か、3年目かな。あれは地域で活躍するボランティア、要するに、いろいろありますけれども、自治会とか社会福祉協議会とかいろいろ含めて、そういうところで活躍する人の育成の場としてつくっているんです。やっぱり何らかのプログラムをつくらないと、教育に対してもギャップがあって、片一方は、いろいろなところで活躍してきた人がたくさんいるわけだから、語学だけではなくて、いろいろノウハウを持っているはずで、銀行で融資をやってきた人もいるでしょうし、アートでやってきた人もいるかもしれない、いろいろな人がいるんだけど、どうもそこをつなぐプログラムが大抵ないと。ただ単に、ちょっと社会の人が学校に入ってみんなで育てる環境をつくろうと思っても、なかなか難しいかなという気がしています。

もう1個、そういう地域との関係でいくと、今、少子高齢化で、60歳、70歳、75歳以上は何万人と、こういうふうになってくることで、これをどうみんなで助け合っていく仕組みをつくるかということで、地域を15の地域に分けて、各地域でお互いに助け合う仕組みをつくらうということで、今やってきているんです。自治会が400あるけれども、それを15の地域に分けて、社会福祉協議会も15の地域に分けて、地域包括支援センター、福祉の何でも相談所ということで、今、整備しているけれども、これも15カ所で、それから支援員といって、お医者さんも各15の地域に全部支援員を配置している。それから、後見人なんかで、いろいろな相談があって、自分のお金の問題とかちゃんとしてもらうための後見人の体制も、行政書士の協会がこの15の地域に対してバックアップをしてくれるとか、要するに、15の地域でお互いに助け合う仕組みを、今、市全体として進めていて、ほぼそれぞれが体制として整ってきて、今度、地域内でお互いに連携をとらなければいけない、そのための体制の議論を今しているところなんです。そうすると、小学校が45校で、15で割ると3校、中学校が20校あるから、15だからほぼ1対1に対応するぐらいの、中学校区ぐらいで1つぐらいの地域の組織のまとまりが今でき上がってきているので、そういうところとの連携を学校とか、先ほど言った能力のあるというのも一つあるんだけど、その地域との連携で、そういうところの連携をする。彼らがやる

うとしているのは、地域の人たちのお年寄りだけではなく子どもたちの面倒も見ようという体制だから、いろいろな意味でバックアップしていく。何かあれば、みんなでバックアップしていこうという体制なので、その地域との連携問題を、片一方の地域の組織化というものも進んでいるので、そういうものを念頭に入れた連携体制というものも、これからは学校のサイドからも、もう1回よく考えてもらいたいなど。みんなで、地域の人たちのお年寄りだけではなく子どもたちも、それから地域のまちづくりもみんなでやっぺいこうと、こういう方向で今進めているので、ぜひその中で学校という組織もやってほしいなと思います。

いいですか。とりあえず、3番目に行きますか。

○武田委員 この中で、2からの連動になるかとは思いますが、青少年会館がすごく有効に使われているんだなというのは、この教育委員会に出させていただいて初めて知りました。文化祭的なものがありますよね。その中でなさっている催し事とか講座の発表なども、イベントは子どもたちが走ってその場に向かうほどの盛況ぶりで活気がありました。このような場所が市内に1個しかないというところが非常に残念で、ほかの地域の方々がうらましがっているという現状があります。イベントだけではなくて、日々の放課後の子どもたちの居場所として、やはりこういった場所というのがありますと、先ほど市長もおっしゃっていたボランティアの育成講座から育った人材のような方が、きちんとこの居場所に行けば、その青少年と交わる明らかな場所として実在すると、その場をかりてまた先に進んでいく好循環ができるのかなと思います。ただ、これだけの規模のものが、先ほどおっしゃった15地域にというふうになると、かなり難しいのかなとは思いますが、何らかの形でそれにかわるものができたりすると、例えばスクールソーシャルワーカーが地域分散で配置されたときにでも、学校のほかに、この居場所というところに日々の連携を求めるといような形ができるのかなと想像し、活用方法をより充実されることを望みます。

この何年か文化祭の視察に伺わせていただいて、いかに生涯教育の中で自分たちが年々培っているものを発表するというのに対してのいかに情熱が強いのかというのを、びっくりするほど感じています。やはり、人は見てもらいたいし、成果のある形をつくり上げたいという気持ちというのは、幾つになっても変わらない情熱のあるものなんだなというのを感じておまして、参加することも、見に行くことも、非常に大事なんですけども、文化祭という形以外に、何となく日々として発表できるということも少し考えていかなければいけないのかなと思いました。そうすることで、もう少し熱が上がるのかなということと、せつかくこの色々とできる方たちが、何かもう少しボランティア的にワークショップなどの活動をしていただけたらなということも感じました。

以上です。

○山形委員 今の武田委員と重なるところがあるんですが、青少年の居場所というところが松戸市は少ない。児童館がありますが、本当にその地域だけということで、その児童館



の中の人々の資質とかもありますけれども、小中学生、例えば不登校で行き場所がないというときなどにどこか行ける場所、他市になります、柏市にパレット柏というオープンスペースがあったりだとか、鎌ヶ谷市は児童館、市民センター、子育て支援センターが1個になっているものがある、子育て支援のおやこDE広場に通っていた子がそのまま小学生になり、通い、そして、おじいちやま、おばあちやまがつくった作品を見られたりとか、そういう多世代交流の場所が4カ所か5カ所あったんです。それを見たときにも、多世代が交流する場所とか、学び合う、育ち合う場所というのが、松戸は子育て支援を頑張っているけれども、その連携がまだ弱いんだなというところを思いました。

今、市長からお話があった、その15の地域に分かれて助け合う仕組みがもうあるのを若者と連携してバージョンアップしていく可能性があるんだなというのを感じましたし、人に貢献することが幸福度を上げることとか、この多忙な生き方の今の社会ですけれども、多忙な中でも人の役に立つことで時間を有効に活用しているという充実感、ストレス軽減の作用があるというような学術的な論文などもありますので、そういうような啓発なども、また続けていただけたらなと思いました。

以上です。

○伊藤委員 ここについては、私は、一番最初の市民の多様な学習機会の提供というところでちょっとコメントしたいんですけども、現在のように高齢者がふえてきて、そういった人たち向けのサービスも多種多様で、もう本当にたくさんあるため、松戸市民が何かをやりたいというときに、松戸市が提供しているこういった催しに、どの程度そのアテンションを払っているのかなと、ちょっと私自身、疑問に感じています。例えば、いろいろなサービス企業とかが様々な催しとか講座とかをもうやっているの、どうもいろいろ見比べてみるとそっちのほうが魅力的かなというふうに思う人が多いのではないかなというふうに思っています。ただ、その場合、もちろん松戸市内ではなくて、どこかに出かけなければいけないとかという不便はあるんですが、そういったものと、競争するということができないんですけれども、やっぱり松戸市の生涯学習もいろいろな催しを提供しているわけですので、そういう高齢者を含めて来てもらうためには、今のような若干総花的なものではなくて、何か松戸市でなければできないようなものとか、講演者や講師を含めて、魅力的な人を引っ張ってくるとか、といったようなことができれば、松戸の人たちをこちらに振り向かせることができるのではないかなという気がする、そういうところをさらに研究していただきたいなというふうに思います。

それから、先ほどのお話の中でいろいろ青少年の集まる場とかというような話が出ていますけれども、ここにあるように、東松戸図書館をこれからつくられるわけですから、それとか、また、すでに市内には市民センターというか図書館や集会場とかいろいろあるので、それのもうちょっとうまく活用というのが何かできないのかなと。今度、明市民センターが建てかえられるので、何かそういうところにもうちょっと新たな視点からの集まれるような場所とか、催しができるような取り組みが、既存のところでもやるというのはなか

なか難しいかもしれませんが、市民センターも大体いろいろなところにありますので、そういったものをさらにもっと活用していくというようなこともできるのかなというふうに思います。

以上です。

○山田委員 大分重なっている点もありますが、先ほどのボランティアの活用のところは、ここに書いてある下から3つ目のポツのところのところがそういった意味なんだろうと思いますので、ここはぜひお願いしたいなと思っています。

この区割りの中で言うと、この柱No. 3のところには書いていないんですが、柱No. 4のところに、結局、歴史や文化に触れる機会の提供ということで、文化ということで、例えば博物館での各種の学習とか、それから歴史的なもの、あるいは、ガンダーラ展とか、そういったこともここに書いてありますし、それから、美術のこともこちらに書いてある。柱No. 4は、文化やスポーツの活動をする人たちが活躍できるように、可能性を發揮できる環境を整えますというカテゴリーなので、この生涯学習という意味でいうと、本当は、文化は文化でも柱No. 3で位置づけてもいいようなものなのではないかなというふうに思います。そういう重なりをどう連携をとって、大綱での仕分け方ということでは、これはこれでもいいんですけども、あまり大きな問題ではないと思うんですが、どう連携をとって最大限施策の効果を上げていくかというところで意識をして、ぜひ各御担当がやっていただければありがたいなというふうに思います。これも前に市長がおっしゃっていました健康寿命をどう延ばすかというところだと思いますので、そういう機会がどれぐらい提供されているのかということに注視して見ていくべきだろうと思いました。

以上です。

○伊藤教育長 簡単に1点だけ。どなたも触れなかった社会教育と学校の連携事業の推進という下から3つ目のポチがあるんですけども、これは、元校長、元教頭、元教員をいろいろな分野に置き始めて3年目になるかな、やっとそれぞれ効果が出始めています。先ほど市長から教育のボランティアについても何かシステムがというふうな話があったんですが、やっぱり教育に関連してボランティア活動をするというのは、結構難しさがあるんだなと思います。子どもたちとかかわるって難しいから、だから、子育ては大変なんすけれども、その分野に自分の専門職をどうやってアピールできるかというのは、やはり簡単ではないと思うんです。だから、それぞれの部分に教員経験者を入れてみたんです。入れてみると、学校でのあり方を熟知されている方々なので、いろいろな連携が図れて、いろいろな新規事業がここから生まれている。そういうことも進んでいるということをおわかりいただければというふうに思います。

以上です。

○本郷谷市長 特に松戸市の場合は、小さな子ども用の施設というのを結構充実させてきたんですけども、やっぱり小学校、中学校、高校の子どもたちとかは、まだ手がつかないみたいです。順番的になかなか手がいかない。そこをやっぱり充実させていかなければい

けないので、その体制について、ただ単に課をつくれればいいという問題ではないと思うので、ここはこれから10年、20年、子どもたちの居場所づくりという意味で、世の中も相当変わってきているから、やっぱりそれを踏まえた体制をぜひつくってほしいなと思います。

それから、健康寿命の話がありましたけれども、この間、NHKかな、AIでやってみたら、健康寿命と何が一番リンクするかといたら、理屈はわからないけれども、一番関係が深いのは、図書館の整備率だと。NHKのAIでやった結果だから、それは、もういろいろな意味のつながりがあった結果なんです。やっぱりそういうものをしっかりさせておくということが、市としても、直接的な効果が見えるだけではなくて、いろいろなつながりが、例えば図書館に行くために歩いていくとか、そこで人が集まると話ができるとか、いろいろなことを含めて、いろいろな意味があるんでしょう。だから、そういう場所というのも重要なと、ちょっと見ていましたけれども。よろしくお願いします。

最後に、4つ目に行きますか。

○武田委員 今ちょっと話題に出た図書館なんですけれども、文化の発信地として一番活用しやすいのが図書館だなと私は常々思っています。いろいろな施策をしてくださっているんですけれども、いつも思うのが、なかなかそれを広報するのが難しいのではないかとこのように感じています。せっかく企画したことが、一部の熱心な方しか知らなかったという形で終わっていくというのはすごくもったいない。先ほどの発表の場もそうですし、そういう告知の場もそうですし、これから図書館を整備していく中で、そういったものをより文化交流点として、あるいは、そういう広報として使っていけたらいいのではないかと考えています。

それと、戸定邸の復元工事があったおかげで随分メディアにも出ましたし、市民の気持ちの上でもすごく松戸のそういう文化遺産に対する気持ちというのが高まったと思います。大分多くの方がご覧になりに来たり、あるいは、戸定邸で行われたイベントに家族連れで参加してくださったのではないかと思います。今までは高齢者がよく来ているなというイメージだったんですけれども、現代美術の展覧会みたいなものをなさったときに、家族連れで来てくださる方が大勢いらっしゃいました。あるいは、芝のお庭のほうで、松戸市内にある商業施設ですか、いわゆる食べ物屋さん等の告知というか、宣伝のようなイベントを組んだり、すごくいい形でこの戸定邸が活用されていることを一番いい進め方として、この3年ぐらい見ています。それに伴ってというわけではないんですけれども、「ここが松戸の誇れるところ」と言ってぼんと思い浮かぶものがあるというのはとても幸せなことで、なかなかそういったものは、こういう都市近隣とか、あるいは有名な観光地というわけでもありませんし、基本的にはないです。ただ、全然ないわけではなくて、ただ知らないだけということが多い。国に指定されたりとかそういうことでなくても、勝手に松戸のものを誇っても構わないわけです。松戸の文化財として指定しているのに、そのことを知らない市民がいっぱいいるというのは、すごく悲しいし、せっかく指定したのにもったいない。

一番思っているのは、松戸神社の天井絵、杉戸絵は、どなたが書いたとか、画家の地位とか、そういったものを鑑みると、現状はまだはっきりはしていないのです。では、どうなんだということではなくて、私はすごく素晴らしいと思っています。先ほど伊藤教育長がおっしゃっていた、退職校長の泉先生が、あの天井画を中学校の美術部の生徒に体験的に描くという講座をしてくださった作品を松戸の駅の展示スペースに展示したものを拝見しました。先生の活動のお話を聞きましたら、日本画というものに触れたことがない生徒が意欲的に取り組んでくれて、飾られたものも非常にレベルが高かった。あの絵が、松戸の文化財に指定されたものといったら、市民が頭にふっと浮かぶものの代表的なものであっても良いと思います。あるいは、板倉鼎展が2年前から展開し、目黒区立美術館で展覧会が開催され、今、聖徳のほうでも藤田嗣治と一緒に共同展という形で、もう1回していただいたりしています。松戸の宝物として板倉鼎の絵が頭に浮かぶというような、そういったことを何かしていくべきなのではないかというふうに思っています。

学校訪問をさせていただきますと、かつて学校ができたばかりのころは、卒業生がいろいろなものをつくって学校に残すというようなことが盛んに行われていました。でも、現実的にはもう場所もなくなりましたし、教育環境が変わって、ああいうものを推進していくのには、授業数の中でこなしていくのは非常に難しいということを現状として聞いています。だけれども、授業の中で、例えば、神社の天井画を1回模写するチャンスがあるとか、あるいは、授業で取り入れられる時間がないのであれば廊下展示であるとか、そういった形で全校に配置したとして大した金額ではないような気がするんです。そういった形で、松戸にはこういう文化財の素敵な絵がありますというものを記憶にとどめるということをやっていたらいいなと思っています。これは前から思っていたことで、では、それが何になるのと言われると非常に難しいんですけども、誇れるものを持つということが郷土愛につながるというふうに思っています。ないよりはあったほうが良いということ、すごくさきやかに大事に思っている一人として、ぜひ推進していただけたらなと思っています。

以上です。

○山形委員 柱 No. 4 に対してですけれども、私は武田委員が今お話しした文化芸術を知らない市民の一人でした。教育委員会に入って学んで、いろいろなきっかけをいただいて学ぶことができたので、知らないことが多いただけなので、多分、知ると、もっと興味も深まりますし、親が知ると、また子どもと一緒に知ることができるなというところで、これからもこの発信と新しい拠点ゾーンなどもとても楽しみにしています。

先ほどの市長のお話にあった健康寿命と図書館の関係性で一つ、私、ぼんと浮かんだ施設があって、大和市の文化創造拠点シリウスが、図書館なんですけど、市民が集えるし、そこで血圧計などを置きまして、健康診断ではないけれども、スタッフがいてというような包括的な場所がありました。その拠点があるからこそ、大和市は人口が増えている場所でもあったりするので、そのような魅力的な場所で、そこにまた文化的なものが発信できる

ものがあるといいなと思いました。戸定邸という存在が、松戸市にとって大きなものだというのを、本当に恥ずかしいんですが、何年も住んでいるのに私はそんなに感じていなかったもので、たくさんの保護者の方に、子どもとともに一緒に学んでいけるような時間がこれからもできたらと思いました。

以上です。

○伊藤委員 短く1点だけ。私も、この戸定歴史館については松戸の誇る文化遺産というか、施設ということで、もっともっとPRしたり、あるいは、市民の方がそれを何かの機会に訪れることができるようなイベントを、軽い催しでいいと思うんですけども、どんどん回数を増やしてやっていただいて、より多くの市民が戸定邸を見ることができるような、そういう取り組みを今後も引き続きやっていただきたいというふうに思います。

先般私が行ったときも、新しく整備された庭園で、子どもたちが、もちろん保護者あるいは先生と一緒に写生をするために来ていたということもあります。いろいろ学校レベルで、そういう子どもたちを巻き込んだ、何かあそこへ訪れる、ちょっと遠いところはなかなか難しいかもしれませんが、そういったものをどんどん増ふやして、さらに市民に親しまれるようなものに、やっぱり一度見れば、本当に親しみを持てる場所だと思いますので、そういうふうな観点から取り組んでいただければというふうに思います。

以上です。

○山田委員 1点だけ。音楽のまちづくりという観点でもっと何かできないかなというふうなことを考えています。クリスマス音楽祭というのを民間がやっていますけれども、各お店が協力して、小さなミニ音楽会を11月、12月の2カ月間やっていっている。そういうようなことと相まって、それから、部活動で非常に強い、今指導をしてくださる先生がいる部活動があります。ただ、これも絶対に永遠ではないわけで、その音楽という種をどう育てるかについてもっともっとできることがあるのではないかと思います。

以上です。

○伊藤教育長 いろいろ各項目で頑張っていただいているんですけども、この松戸の魅力を高めますという部分をもっと前面に出してもいいのかなという気はします。

次のその他のところで言うつもりだったんですけども、この教育大綱も、1回目につくらせていただいたときに、満遍なくというか、何しろ初めてのことなので、どの分野にもというふうな思いが強くて、私たちもいろいろな意見をまとめながら作成したわけですけども、例えば、文科省が総合教育政策局というものを去年の秋につくりました。要するに、学校教育とか、社会教育とか、もう区別できない。今日もいろいろな意見の中で、柱No.1を論じながら柱No.2、3、4と、あるいは、柱No.3を論じながらこちらとか、重なる部分がいっぱいできています。いろいろなところと、私たちもですけども、つい先日も、子ども部と幼児家庭教育についていろいろな話をしたところですよ。そうやっていろいろなところと絡みながら、みんなでやっていかなければいけない。みんなでやりながら、いろいろな特徴を松戸市がせっかく出しているのに、その一番メインの教育大綱が満

遍なくというのは、そろそろ殻を破らなければいけないのかなと考えています。一応、予定では平成32年度までこの大綱でいくということになってはいますが、別にその予定を守る必要性というのは、そんなに強くは縛られていないと思うんです。次の新しい魅力を打ち出すための教育大綱づくりということに着手し始めても、違う言い方をすると、あと2年しかないので、そういう意味でも、そういう姿勢を私たちのほうで出し始めてもいいのかなという気が実はしていますので、よろしくお願いします。

○本郷谷市長 私のほうから一言。1つは、柱No. 4にいろいろな歴史や文化の提供の話がありますけれども、市全体としても、文化を大切にしまちづくりとか、文化創造都市とか、文化を一つの切り札にして、いろいろな活動をしていて、例えば PARADISE AIR というプロジェクトですけれども、海外のアーティストに松戸で滞在してもらうプロジェクトですけれども、去年もロングステイという3カ月のプロジェクトで募集したら、世界100カ国ぐらいから500人前後の応募があって、それから、ショートステイといって1カ月ぐらいのものについても、2018年度は60組ぐらいが松戸に来て活動しているんです。それも我々としては力を入れているし、先ほどあったクリスマス音楽祭も、市がいろいろな意味でバックアップしながらやったりしているし、いろいろな文化的なことを、松戸は産業についても、最近だったら、漫画などそういうものをつくっている人たちが松戸市に相当いて、そういう人たちの支援を市としてもバックアップしているし、今回、4月1日からスタートする松戸ビルにインキュベーション施設として、新しく事業をしていく人たちの支援施設をつくるんだけど、それは新しい事業と文化とのコラボレーションということで、文化的なことが絡む活動をする人を優遇していこうと、こういうプロジェクトもやっているし、いろいろな意味でやっているの、これは教育委員会の事業とか言わずに、ぜひ連携をとってやってほしいなど。全体として、上げてほしいなど。

それから、2つ目は、図書館だとか、あるいは美術館というほどでもないでしょうけれども、展示会場だとか、文化市民会館だとか、今いろいろなものも古くなってきているので、新しい体制整備ということで、今ずっと検討してきて、これだけではなくて市役所とか含めて、間もなく、まちづくりのほうでやっているけれども、大体このようなものをつくっていききたいという骨格がそろそろでき上がってくると思うので、そうすると、具体的に図書館とかいろいろな文化的な施設をどういうふう、ただ単に建物をつくれればいいという問題ではないから、それを運営する人あるいはお互いの連携も含めて、そういう議論をこれからも積極的に始めてほしいなど。要するに、松戸の文化はこうあるべきだというのができたら、そういう場所的な議論がそろそろ本格化するので、ぜひ出おくれなようにしておいてほしいなどという気がします。その2点です。

そういうことで、一応、1時間半ぐらいいろいろな話をしてきたんですけれども、フリーディスカッションに近いですが、いろいろな意見があればぜひ。

○山田委員 教育長からもありましたけれども、今回改めて教育大綱を見直させていただきました。当時の経緯ももう1回振り返りました。平成27年から始めて平成28年に策

定されて、3年です。当初3年から5年というような建てつけで、文科省のほうからあったりして、これは一応5年間めどで平成32年までということになっておりますけれども、教育長がおっしゃったとおりで、これを見直す検討の中で肝心なことが見えてくるのではないかと思います。検討し始めたら、これはやはり1年間ぐらいはかかりますので、あの年は年に4回総合教育会議をやって、ようやく成案を得たというところですから、1年ぐらいかかる。そうしたら、そうやっている間にもう4年が過ぎてしまいます。ですので、ぜひこれは検討をやりましょうということです。

その際に、これは私の個人的な希望なんですけれども、いろいろな文化的な背景があるところでは、その町の子育てについてのこんな子育てをやろう、こういう子どもに育てよう、あるいは、こういうふうに成長していこうというお約束事みたいなものをつくっています。これはそこら中にあるので、例に引くまでもありませんけれども、会津なら会津で什の掟とか、たまたま見た小田原ではおだわらっ子の約束とか、そういうようなことがあります。私たちが一つの方向を共有するという意味では、しかも、例えば私立とか県立の小中学校まで声をかけて何かやろうと思うときに、教育委員会なのか、市なのか、わかりませんが、このエリアではこうやって子育てをやっていこうよというような、みんなが共有できるような標語みたいなことというのは、私は、それですぐに変わるかどうかはともかく、それを共有する過程でいろいろなものができるのではないかと思います。だから、大綱の見直しとともに、そういった共有できる目標みたいなものを生み出す努力を我々はしているのではないかとということ意見を申し上げます。

以上です。

○山形委員 今全ての議論を聞き終えて、保護者として、2020年、教育が大きく変わるというのを講演する機会があるので聞きます。そうすると、100人ぐらいお母様がいても、ほとんどの皆さん、オリンピックがあるだけで、教育が大きく変わることは認知していらっしやらないことや、Society 5.0という考え方も、「聞いたことありますか」と言うと、誰も知らない。でも、内閣府は打ち出しています。そのぐらい大きく時代が変わっていく中で、何を私たちは目標として生きていくのかというときに、子育て支援をしながら、幸せな大人になるために、勉強できるできないとか、いろいろな生き方があるんですけども、幸せを感じられる大人、オランダのような考え方かもしれないけれども、そのようなビジョン、幸せな大人であり、幸せな子どもという考えで、松戸で子育て、教育を受けるとそのように生きていくことができるというような、大きなビジョンとしてあるといいと思いました。

幸せに生きるために必ず必要なのは人とのつながりです。孤独で、人は壊れていきます。虐待などを起こしてしまうというのも大きな問題はありますけれども、やっぱりその背景には孤独があったり、人と人が支え合って生きていないというような背景を強く感じています。IT化が進み、便利になる反面、人とのつながりも減っていくこともありますので、そのような何か幸せに生きるためにはということろで軸を持って、自分自身ももっと

これからたくさんの方のことを学んでいかなければいけないんですけども、そういうようなビジョンがあると見えてくるものがある。松戸で子育てをしてよかったとか、子どもたちが松戸にこのまま暮らし、世代をつないでいくような教育をこれからも受けられればと思います。

以上です。

○武田委員 前回の教育大綱を決めたときに、本郷谷市長の「はじめに」という言葉の中で、「子育て、教育、文化を軸とした都市ブランドをつくる」というところがあるんですけども、これは何だろうというふうに、今回この会に対して考えてみました。よく言われるのが、松戸というのは、まるで都市に出勤していくためのベッドタウンのように思っているかもしれないけれども、逆に言うと、それだけの近距離であるということは、あちら側の都市部からも、出向いてでも行ってみたいというものさえあれば、来られる距離感であるということが現実としてあるわけです。その中で、さして遠いわけでもないというところで、例えばですけども、東京都の何々市というようなところでの展覧会なんかを拝見しても、意外といいものがやられていると、すごく人の集客が上がっています。松戸に来たらこれが見られるとか、この音楽祭があるとか、何かそういう魅力的なもの、ちょっと大きなことを言って申しわけないんですけども、これがあるからあそこに行きたいというようなものが一つあると、その松戸市という名前がやはりブランド化されるのではないかな。そうすると、支援がいっぱいあるからそこに住みたいとかというのはもちろんのことなんだけれども、そうではなくて、何となくすごく華やかなイメージとして、あの町に住んでみたいというような人の流動性が起こるのが、やはりもう一つの魅力なのではないかと思って、ぜひその部分を育てていけるような施策を考えていけたらなと、それが大綱の大きなイメージビジョンにつながっていけば、一番理想的だなというふうに私は思っています。

○伊藤教育長 山田委員からあったように、あるいは、山形委員や武田委員もそうなんですけれども、やっぱり松戸というものをもっと前面に出した大綱づくりのほうが、私は、次はいいなと思っています。そもそも教育大綱を1回目につくったときは、どうしてもこれまでの教育委員会の概念が強くありましたから、生涯学習部と学校教育部の考えというか、これまでのあり方がベースになってつくられたわけです。でも、やはり教育大綱というのは、国もそうですけれども、市長がそもそも位置づけるそういうものとしての性質が強いわけですから、教育委員会としてではなくて、やっぱり松戸市としてこういう子どもたちをつくりたい、こういう市民をつくりたい、そういうことを前面に出す、そういう必要性が、私は次の時代というか、もう大きな転換期に来ていると思っていますので、先手を打って、そこに打ちかかるとするのが私は必要だと思います。そうすれば、市長が前からおっしゃっている県立高校にしる、私学にしる、私たち教育委員会はもう手が出ませんが、でも、市長がそういうメッセージを発信していただければ、県立にしる、私学にしる、じゃ、みんなでやろうかという、そういうふうな姿勢を持たざるを得ない。やっぱりそう



いう動きをつくるためにも、ぜひみんなで、また知恵を集めたいなど、集めていただきたいなというふうに改めて思いましたので、よろしくお願いします。

○本郷谷市長 時間もちょっと来たので。この大綱は、初めて大綱をつくったわけで、そういう意味ではスタートの大綱ということで、3年そういう方向でやってきたわけです。タイミングとしても、見直すのにちょうどよさそうなので、今日出たような意見を踏まえながら、もう1回、大綱を今年はちょっと議論するということにしたいと思えますけれども、よろしいでしょうか。

そういうことで、今年は進めたいと思えますので、よろしくお願いします。

どうもありがとうございました。